ラブカクテルス　その７６

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラブカクテルス　その７６

【Ｎコード】
Ｎ８１６１Ｅ

【作者名】
風　雷人

【あらすじ】
今宵はあなどれない味わいのカクテルです。ご賞味あれ。

いらっしゃいませ。
どうぞこちらへ。
本日はいかがなさいますか？
甘い香りのバイオレットフィズ？
それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？
はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。
少々お待ちください。
本日のカクテルの名前はアナドレナリンでございます。

ごゆっくりどうぞ。

私は目の前の相手を堂々と見た。
周りも人だかりが出来始めた。
その中から手を挙げて、立候補をする男が三人揃った。
よし。
私は相手に殴り掛かった。
相手は私よりも二周りはデカイ、見るからに強そうな男だったが、
私が先制を取ったせいで、不意を突かれたのか、ヨロヨロと倒れ掛かった。
私はその隙を一瞬にして突き、足を掬ってその体を地面に沈め、最後の顔面への寸止めでフィニッシュを決めた。
周りの立候補で構成されたジャッジは、全員私に軍配を挙げた。
完璧な勝利だった。

昨今、面白い法律ができた。
ケンカ正当法だ。
いくら法律でケンカや暴力を無くそうと、検挙や罰則をしてみたものの、人間の本能の一つであるその性質は、容易く変えられるわけもなく、そして無くなる事もなかった。
そんな中で、厳しい取締りを避けて行われていったのは、影でのいじめや、陰険な集団暴行、そしてケンカでは終わらない殺人事件。
政府はそれを重く捉えて、精神分析を経てその原因を突き止めた。
そしてその結果、心の中にあるモヤモヤの発散、または溜まり溜った恨みなどからの復讐が理由の大半を占めている事がわかり、そして気付いた。
少し前の世間的な常識では、ケンカはご法度だった。
争いは野蛮で、何も解決にならない。
しかし違うのだ。
ケンカは両成敗だが、途中で止めて辞めさせたら後を引くのだ。
ならば、お互い勝負が着くまでやり合わせるのが一番。
しかし人には体力や技などの強弱があり、ルールなしにやったなら、大怪我や、最悪の場合殺人ともなりかねない。
そこで、ケンカは大衆の面前で行う事にし、その場合、通行人に人垣でそれを囲んでもらい、一対一、もしくは同人数での正々堂々とした戦いを主とし、その人垣の中からジャッジとして三人の立候補を立てて、そのジャッジの判断でケンカの勝ち負け、或いは引き分けなどの終止を決めてもらう。
もし、凶器などを使用した場合、そのケンカは無効になり、そして使用者は犯罪者として検挙の対象となり、追われた末にブタバコ行きになるのだった。
だが、あくまでもこの法律は、ケンカ両成敗が目的で、その原因の勝ち負けが正当化される訳ではなかった。
もしもケンカの原因が空き缶のポイ捨てを注意したことから始まり、しかし勝った方がポイ捨てをした悪い方だとしても、それはそれ。

結局はケンカに良い悪いはあまり関係がないのだ。
しかしながら私は、どうせ戦うのなら、ケンカをしても正しい方が強く、そして勝たなければならないと思う。
でないと、過剰な犯罪が減ったとしても、正義はどうなる。
悪が当たり前に蔓延る世の中であってはならない筈だ。
そして私が考え出したのは、薬。
スポーツで言えばドーピングだが、あらゆる格闘技の技を頭で想い浮かべるだけで技を繰り出せる薬。
私はそれを開発したのだった。
そしてそれがこれだ。
アナドレナリン。
私はこれで正義のために、日夜ケンカを続け戦い続けているのだった。
私は元々強い人間ではなかったし、ケンカというケンカだって、物心着く頃から遡っても、これといってしたことさえなかった。
しかし格闘技は好きだった。
自分の代わりに相手とぶつかって行き、正々堂々と戦う選手の姿は、普段の欲求不満をすっきりさせてくれたからだった。
そんな私が就いた仕事はまったく関係のない化学薬品の開発部。
子供の頃から化け学に異常に興味を持ち、なんでもかんでも混ぜてみないと気が済まないその性格は、その後も変わらずに、これまで会社が持ってくる課題の薬を、絶妙な薬品の配合で作るのが天職となっていた。
それらは風邪薬から始まり、育毛剤や湿布、化粧品や殺虫剤なんかまで作り、そんな中で私は、ある特別な薬品の化学反応を見つけた。
それが、思考回路と各身体中の神経へのダイレクトな反応を直接起こす事に繋がるものと知り、自分の身体で試してみたところ、驚きの結果となったのだった。
確かにトレーニングをしないと、使用した後の筋肉痛が半端ではないのだが、それなりの練習や修行などをしなくとも、どんな技でさ

え、私は頭で想像するだけでそれらを繰り出せるようになった。
そしてそれがエスカレートして、プロレスや、アクション映画をむさぼるように見ては、このタイミングよく発足したケンカ正当法を理由に、試すのであった。
私はヒーローを気取った。
全ての悪を倒していく勢いだった。
近年、原油が無くなり車は電気モーター車が支流となってしまったが、私はそんな調子の乗ったついでに今流行りのエンジン音をオプションで付けていて、車内で軽快にそれを鳴らした。
音は伝説の車、フェラーリ、ポルシェ、ハコスカの三種類から選ぶ事ができ、今の気分からはポルシェを選択しながら、今日のケンカの勝利に酔った。
やはり正義の味方にはカッコイイ軽快な音の車が良く似合う。
私は制限速度しか出せないモーターのアクセルを思いっ切り踏んでまた、町を徘徊した。

私はその内、悪いやつらを粗方やっつけ、そして何だかつまらなくなってきていた。
もっと手強いヤツはいないか？
そんな噂を探しては、悪を懲らしめたが、すぐに形が着いてしまう。
そんな時、昔の大学仲間の科学研究をしている友人から、タイムマシンを開発したと、興奮の電話をもらった。
それにはさすがの私も驚き、直ぐに行くと電話を放り投げては、その研究に急いだ。
何だか丸く小さい球体のそのマシンには、幾つものホースやコードが繋がっている。
決して広くないその中にある椅子には簡単なレバーとボタンが何個かあるだけで、私はその友人に、からかっているのかと、絡んでしまいそうになるくらいの簡単なものに、違った意味で驚いた。
しかしその友人は、親友と言っても過言ではない仲で、冗談でそん

なに興奮する性格でないのはよく知っていた。
お互いの研究結果をよく報告し合うほどの関係から、当然その友人は私の薬の事も知っていたし、信用性については疑う必死などはない。
早速と言った友人は、実験を見せるからタイムマシンの中に入るようにと私を促し、狭いその場所で、私は窮屈に思いながらも仕方なく乗り込んで、言われるがまま、小さな窓を覗き込んだ。
友人がレバーを操作しながらボタンを押すと、外の風景はいきなり真っ暗になったかと思うと、七色の光の雨が降っているような風景に変わった。
そして、それほど時間が経たないうちに、窓の外には野原が広がる広大な大地となり、友人はホッとして肩の力を抜いたような仕草をした。
軽い扉の開く音がすると、友人は躊躇いもなく外に出て伸びをし、私もおっかなびっくりしながら、その野原に出ると、爽やかな風を感じた。
友人は、まだ恐竜が陸に上がる前の時代だと、私に説明した。
そして一番平和な時だろうと、息を大きく吸い込んだ。
私は、確かに場所が変わったようだが、なんだか過去に来た気がしないと言ってみると、友人は植物辞典を私に見せて、そこに書かれている絶滅した植物を探してみればいいと言った。
確かにそれらはあるある。
そんな事に興奮している私に友人は、もしタイムマシンで動物や人がいる時代に行ったならどうなると思う？と聞いてきたので、私はきっと未来を変えたくなると正直に答えた。
すると友人は、それのどれを無くすとどれがなくなってしまうのかはこのタイムマシンでは判断がつかない。と言った。
もし、その目の前の草を今一本抜いたら、次の瞬間二人共消えてしまうかも知れないし、帰った先の世界がいつもの世界ではないかもしれない。

せっかくタイムマシンを作ったが、その無限の連鎖反応を考えると、当たり障りのないこの時代くらいしか気楽に来れないと、友人は青々とした空を見上げた。
確かに平和だ。
ここではいつもの醜い人間達の争いなどどこにもない。
私は友人をさすがだと思った。
確かに私が色々な時代に顔を出し、そこで言い様のない悪を見ていたら、何の考えもなしに薬を使って、歴史を変えてしまっていただろう。
そういう時代は人間が生まれてからいくらでも存在し、そしてきりがない。
正義の味方も時代の流れには逆らえないと言う訳か。
しかしふと思う事があった。
私は友人に頼んだ。
頼むから未来に連れて行ってほしいと。
私は薬を使って理想の世界を作れる筈だと熱弁し、少し迷い始めた友人を無理矢理タイムマシンに押し込んだ。
どうなるか知らないぞと、友人はしぶしぶ私の言う事を聞き、タイムマシンのボタンを押した。

着いた先は自分達がいた時代から丁度百年後。
まだ、いくらなんでも人類は絶滅していない筈の未来。
私と友人は周りの景色に圧倒された。
整然と並ぶ高くそびえるビル群と、美しい緑がうまく共存していそうなその町は、何だか清潔感が漂い、しかし不気味なほど静かだった。
私達が降り立ったところはどうやら公園の一画だったようで、そんな景色が周りを囲っている中に二人はしばらく佇んだ。
時間が早朝だからか、人気はなく、ただただ少し涼し過ぎるくらいの風に樹々と草達が揺れていた。

私はワクワクしながら、町に出てみようと友人に告げると、彼はそれを拒んだ。
そして現代に帰りたいと言い出したので、私は一人でここに残ることに決心した。
私は堅い握手で友人を見送ると、その公園の中の一本道を大通りがありそうな方向に向かって歩き出した。
そろそろ普通なら通勤などで人が大勢町に溢れる時間だと思ったからだったが、大通りには人だけでなく、車さえも走っていない。
未来は仕事をしなくていい社会になったのだろうか？
私は頭をヒネッた。
するとそんな私の肩を軽くポンポンと叩くものがあった。
振り返るとそこには、顔の整ったいかにも美男子と言うべき男が立っていた。
彼は私を不思議そうな顔して見ながら、なぜここにいるのかと、丁寧な口調で聞いてきた。
私は過去からタイムマシンに乗って、未来にやってきたと、自分で言いながら、何かおかしな事をしゃべっているなと、感じた。
確かによく映画などで、未来からの訪問者は聞いたことがあるが、過去からというのはあまり憶えがない。
考えてみれば、過ぎ去った過去からの訪問者なんて、もしかしたら余計なお世話の、ただの時代遅れなのかも知れない。
私はそう思いながら何だか恥ずかしくなった。
しかし男は、少し笑顔になると、そうでしたか。ようこそ未来へと、歓迎してくれた。
それから彼は私に、その来た理由を聞いてきたので、私は少し恥ずかしがりながら、一応悪者がいれば退治に来たのだと告げると、彼はまた、笑顔を一層輝かせて今の世の中に悪などは死語なくらいいないと告げ、そしてそれが全て、マザーコンピュータで管理された世界だからだと言った。
私は自分の時代にもあった、コンピュータに支配された自由のない

社会だと、目を輝かせ、彼に言った。
君達はそんな人生で満足しているのか？
私が人類に自由を取り戻させてあげようと、勢い勇んだその瞬間、彼は私に、危険分子だと言った。
彼は私を羽交い締めにすると、ある建物まで凄い力で引きずっていくと、牢やのようなところに押し込めた。
そして言った。
秩序を乱す悪者め。ここで処分を待て。
正義の味方のつもりでやって来たのに、この時代では悪者扱いか。
私はガッカリと肩を落として、少し調子に乗っていた事を後悔すると、突然、その部屋の壁が白く光り始めた。
そのうち光りは広がりを見せて、その中から見覚えのあるものが現れた。
タイムマシンだ！
私はその中から手を振っている友人に、涙して手を振り返えした。
そして私はそのお陰で、何とか難を逃れて元の世界に戻る事に成功した。
タイムマシンを降りると、友人が言った。
少し気掛かりだったから、もう少し先の未来を覗いてみた。
そしたら、世界が皆正義の味方のカッコで、それを憧れとして流行し、あちこちで悪者をでっち上げては戦う野蛮な世界になっていたので、それを阻止しに連れに戻ったのだと。
私はそれを聞いて、唖然となり、ますます正義の在り方が解らなくなった。
そして、きっとあの後に正義について熱く語って、未来の人達を洗脳してしまったのであろう自分のせいで、履き違えた正義がはびこり、大人しくて純粋な、あのコンピュータに造られた人間達が、お互い争うようになっていたとしたのなら、やはり私は悪の帝王そのものになるところだったと、ガッカリ肩を落とし、溜め息を漏らすしかなかったのだった。

ん？
僕はタイムマシンの中で小さい袋に入った薬を見つけた。
きっと友人が落としていった噂のアナドレナリンに違いなかった。
僕はなんだか良からぬ事を考え始めている自分がいるのに気付いた。
正義の味方か。
僕には理性を止める自信がなかったのだった。

おしまい。

いかがでしたか？
今日のオススメのカクテルの味は。
またのご来店、心よりお待ち申し上げております。では。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8161e/

ラブカクテルス　その７６

2010年12月12日02時56分発行